

謠曲から童話へ

水 谷 年 惠

五六

羽衣の童話化

謠曲は文章に節を附けて歌ふもので、此の謠曲の意を所作にあらはしたものが能樂であります。

謠曲は室町時代に興つた文學であつて、奈良朝文學の代表者が萬葉集であり、王朝文學の代表者が源氏物語であるなら、近古文學の代表者は謠曲であると言はれてをります。

其の行文は歌語を根底とし、更に佛法の説を以て潤色した美文で、前代の美辭や麗句を綴つたものであります。してその材料は、上古中古の古典に見える傳説や歌物語から、近古時代の戦記物に

至るまで、凡そ有名な文章や話篇から、殆ど悉く採つたものであります。

今日傳つてゐる謠曲は數百番にも達してをりまして、觀世・寶生・金春・喜多・金剛の流派によつて文句に多少の相違がありますが、一般に行はれてゐるものは、二百番内外であります。其の内でも有名なものの一つが、只今童話化を試みようとする羽衣であります。

羽衣は神話を種として、東遊(あづまあとそび)の故事を加味したもので、駿河の三保の松原へ、天人が降りて來た事を作つたものであります。羽衣を松に掛けて置いたのを、漁夫に拾はれて天に歸

ることが出來ず、悲しむ所が一篇の眼目になつてをります。其の天人の悲しむ様子が、まことに優美で、謂はゆる哀しんで傷らずと言つた風でありまして、謠曲の内でも此の羽衣のやうに精神高尚で、餘情遠大なものはあるまいと言ふことであります。天人が漁夫に乞ふて羽衣を返して貰ひ、其の所望によつて舞樂を奏でて昇天する所で一曲が終つて居りますが、富士の高嶺に三保の松原といふ、秀麗な風光を背景にとつて一段と雅趣を高めてをります。

私は此の謠曲羽衣の一篇に漲つてゐる、高尚な優美な、しかも壯大な情趣を、幾分かでも幼兒の心情に觸れさせて見たいものだと思へまして、此の曲の童話化を試みるのであります。

所で此の謠曲を童話化する上に、少くも三つの要點に着目する必要があると思ひます。天人が漁夫に、「それは天人の羽衣とて、たやすく人間にあ

たふべき物にあらず。もとの如くに置き給へ。と言つて返させようとするが、漁夫はどうしても返さうとはしません。其處で天人が、美しく、優しく悲しみます。其處のやさしさ、美しさ、上品さは、最早地上のものではなくて、天上界のものであります。此の天上界の微妙なる情趣を、どういふ風にして幼兒に觸れさせるかといふのが要點の一つであります。

天人の嘆きがあまりいたはしいので、漁夫が羽衣を返すことにきめ、其の代りに天人の舞樂を所望すると、「嬉しやさては天上に歸らんことをえたり。」と天人は羽衣を着てから舞はうとします。漁夫は、「いや此の衣を返しなば。舞曲をなさて其まゝに。天にやあがり給ふべき。」と疑ふ。其の時天人が、「いや疑は人間にあり。天に偽りなきものを。」と言ひます。此の「疑は人間にあり。天に偽りなきものを。」の天人の一語、生きとし生ける人

間の肺腑を貫いてあまりがあります。汚濁の人間界に清淨の天上界から、一條の靈光がさつとばかりに閃いたかの感を抱かずに居られません。此の潔白さ此の氣高さを、どんな風に童話に盛るかと第二の要點であります。

第三の要點は、東海の天に懸る玲瓏たる富士の姿、春の日のうら／＼と枝も鳴らず波も起らぬ三保の松原を、どう幼児の眼前に展開させるかといふ事であります。

以上三つの要點を生かす爲には、まづ謠曲羽衣を十分に味讀し、鑑賞することが大切であります。次には天人の義しい心、清らかな心、嚴かな心を我と我が心情に反映させることに大いに努めるのであります。幼児の眼に幼児の心に、此の啾嘶をする先生が、三保の松原の天人を彷彿たるものとして映じたなら、此の童話は大成功と言へるのであります。俗界の俗人のまゝで、心も洗はず

情も清めず、美しさも、やさしさも、氣高さも己の心の中に用意せずに臨んだのでは、此の謠曲を童話として生かすことは不可能であらうと思はれます。

背景に繪畫の力を借り、天人の舞樂の所で音樂を活用したならば、此の啾嘶に深い興趣を添へるであらうと思ひます。左に謠曲羽衣の全文を掲げ、次に之を童話とした一例を擧げることにして參考に供したいと思ひます。

謠曲の羽衣

元 清 作

シテ 天人。

ワキ 漁夫 伯良(白龍)

ツレ 漁夫。

處 三保の浦。 時 三月。

(シテ 主人公。 ツレ 副。 ワキ シテの

客。)

(一聲、詞。 文句の上の名目。)

(サシ、クリ。 謠ひ方の上の名目。)

ワキ一聲、風早の、三穂の浦わを漕ぐ船の。浦人さ
わぐ浪路かな。(風早の三穂の浦わを漕ぐ船の船人
騒ぐ浪立つらしも。一萬葉集) サシ「是は三保の松
原に。伯良と申す漁夫にて候ふ。ツシ「萬里の高山
に雲忽におこり。一樓の明月に雨はじめて晴れり。
げにのどかなる時しもや。春のけしき松原の。浪
立ちつゞく朝霞。月ものこりの天の原。及びなき
身のながめにも。心うらなるけしきかな。(漁夫の
如き賤しき身にも空に心の浮き立つ春の景色だ
な。あ。歌「忘れめや山路をわけて清見がた。はるか
に三保の松原に。たちつれいざやかよはん。風向
ふ。雲のうき浪たつと見て。釣せて人やかへるら
ん。待てしばし春ならば、吹くものどけき朝風の
松は常盤の峰ぞかし。浪は音なき朝なぎに。釣人
おほき小舟かな。ワキ詞「われ三保の松原にあが
り。浦のけしきをながむる所に。虚空に花ふり音
樂きこえ。(天人が近くありてゐるしるし。) 靈香

(れいきやう) 四方に薫ず。是ただごとと思はぬ所
に。これなる松にうつくしき衣かゝれり。よりて
みれば色香たへにして(色香すぐれて)常の衣にあ
らず。いかさまとりてかへり古き人にもみせ。家
の寶となさばやと存じ候ふ。
シテ詞「のうその衣はこなたのにて候ふ。何しにめ
され候ふぞ。ワキ詞「是はひろひたる衣にて候ふ程
に。とりて歸り候ふよ。シテ「それは天人の羽衣と
て(天人の着物で、衣でありながら翼の用をなす
もの。)たやすく人間にあたふべき物にあらず。本
のごとくにおき給へ。ワキ「そも此衣の御ぬしと
は。さては天人にてましますかや。さもあらば末
世の奇特(末の世のしるし)にとゞめおき。國のた
からとなすべきなり。(前には家の寶といひ、いよ
ゝ、大切になつて國の寶とまで思ふ。衣を惜しむ
情に注意。)衣をかへす事あるまじ。シテ「かなしや
な羽衣なくては飛行(ひぎやう)のみちも絶え。天

上にかへらんことも叶ふまじ。さりとは返し
たび給へ。(さやうてはあらうが返して下さい。)

ワキ此の御詞をさくよりもいよく伯良力を得。

本より此身は心なき。天の羽衣(天「あま」を海士
「あま」に云ひかけた。)とりかくし。かなふまじと
て立ちのけば。シテ「今はさながら天人も。はねな
き鳥の如くにて。あがらんとすれば衣なし。ワキ」地
にまた住めば下界(天上に對して此の世界を云ふ)
なり。シテ「とやあらんかくやあらんとかなしめ
ど。ワキ」伯良衣をかへさねば。シテ「力及ばず。

ワキ「せんかたも。地」涙の露の玉鬢。(なみをせん
方無みと涙のなみとにかけ、たまを露の玉と玉鬢
とにかけた。)かざしの花もしをくと。天人の五

衰(五衰は五種の衰弱を天人の身にあらはすこと。
命終る時には五衰相現すと佛書にある。その第一
に頭上の花鬘忽に萎むとあるをこゝで云ふ。)も。

目のまへにみえてあさましや。

シテ「天の原よりさけみれば雲路まどひてゆくへ
しらずも。(丹後風土記の歌。これから天人の悲し
む感情を寫す。)

地「住み馴れし空にいつしかゆく
雲の。うらやましきけしきかな。迦陵頻伽(かり
やうびんが、極樂淨土に住む鳥で常に美妙な聲で
鳴く。)のなれなれし。聲今さらにわづかなる、雁
金のかへりゆく。天路(あまぢ)をさけばなつかし
や。千鳥鷗の沖つ浪。ゆくかかへるか春風の。空
に吹くまでなつかしや。(まづ行く雲を羨み、迦陵
頻伽を戀ひ、雁や千鳥や鷗や、春風までもすべて
歸るものが皆美ましい。昨日まで自由自在であつ
た身が、一枚の羽衣を取られては地にも住まれず
天にものぼられぬ苦しみを説き盡してゐる。)

ワキ「詞」いかに申し候ふ。御姿を見たてまつれば。
あまりに御痛はしく候ふ程に。衣をかへし申さう
ずるにて候ふ。シテ「詞」あらうれしやこなたへ給は
り候へ。ワキ「しばらく。承り及びたる天人の舞樂。

たゞ今こゝにて奏し給はゞ。衣をかへし申すべし。
シテ「うれしやさては天上にかへらん事をえたり。
此よろこびにとてもさらば。人間の御遊（ぎよい
う）のかたみの舞。月宮をめぐらす舞曲あり。た
ゞ今こゝにて奏しつゝ。世のうき人につたふべし
さりながら。衣なくては叶ふまじ。さりとはま
づかへし給へ。ウキ「いや此の衣をかへしなば。舞
曲をなさて其のまゝに。天にやあがり給ふべき。
シテ「いやたがひは人間にあり。天に偽なきもの
を。ウキ「あらはづかしやさらばとて。羽衣をかへ
しあたふれば。シテ「少女（をとめ）は衣を着しつゝ、
霓裳羽衣（げいしやうい）の曲（唐樂の曲の名）を
なし。ウキ「天の羽衣風に和（くわ）し。シテ「雨にう
るほう花の袖。ウキ「一曲をかんで。シテ「舞ふとか
や。地「東遊の駿河舞。（駿河舞を東舞とも云ひ後
には東遊とも云ふ）此のときやはじめなるらん。」
地「それ久方のあめといつば。二神（伊奘諾、伊奘

冉の二神）出世のいにしへ。十方世界（東、西、南、
北、東北、東南、西北、西南、上、下）を定めしに。
空は限りもなければとて。久方の空とは名付けた
り。——」然るに月宮殿（月界の御殿の名）のあ
りさま。玉斧の修理（立派な建物。）とこしなへに
して。地「白衣黒衣（びやくえこくえ）の天人の。
（白衣の天人十五人、黒衣の天人十五人、總べて三
十人の天人が、一月を持ち分けて毎夜つとめをす
るを云ふ。三五は其の片方の十五人を指す數。）數
を三五に分つて。一月夜々（いちげつや）のあま
少女。奉仕をさだめ役をなす。シテ「我も數ある天
少女。月の桂の身をわけて。（月中に桂の木がある
といふ故事によつて、桂を月の事にもちひる。桂
の實を身にかけてある。われ月界に住む身を分け
ての意）假に東（あづま）のするが舞。（假に東國
に天降つたの意、あづまは東國と東遊との意を兼
ねてゐる）世に傳へたる曲とかや。

クセ、春霞たなびきにけり久方の。月のかつらも
花やさく。(春霞たなびきにけり久方の月の桂の花

や咲くらん。後撰集。春霞のたなびいてゐるのか
ら思ふと月界の桂の木も花咲く頃であらう。)げに
花かづら色めくは春のしるしかや。おもしろや天
(あめ)ならで。こゝにも妙なり天津風。雲の通ひ
路吹きとぢよ。少女の姿ししばしとままりて。(古今
集僧正偏昭の歌。空吹く風に雲の通ひ路を閉ぢさ
せて、しばしの間でも天女の姿を見て居たい。)此
の松原の。春のいろを三保がささ。(三保のみに見
るのみをかけてある。)月清みがた富士の雪。いづ
れや春のあけぼの。(いづれや春の景色ならぬ、す
べて春の曙である。)たぐひ浪(浪のなに無しのな
をかけて。)も松風も。のどかなる浦のありさま。
そのうへ天地は。何をへたてん玉垣の。内外(う
ちと)神の御すゑにて。(天上も下界も隔つべきわ
げがないと云つて隔の字から玉垣を出し、垣の内

と云ふ意から内外に續けたのである。内外の神は
伊勢の内宮、外宮。)月も曇らぬ日の本や。

シテ「君が代は。あまの羽衣まれに來て。(來てに
着てをかける。)地撫づとも盡きぬ巖ぞと。(君が
代は天の羽衣まれにきて撫づともつきぬ巖なるら
ん。一拾遺集)聞くも妙なり東歌。(その古歌を聞
くと東歌を聞くと兼ねていふ。東歌は東遊に歌ふ
歌。)聲そへてかずくの。笙・笛・琴・箏・篳篥(しや
う・ちやく・さんくご。何れも樂器の名。)孤雲の
外に充ち満ちて、落日のくれなるは。蘇命路(そ
めいろ、染色の意を兼ねぬ。)の山をうつして。(蘇命
路は須彌山ともいふ。佛法でいふ想像の山。紫色
部の歌に、「北は黄に南は青く東しろ西くれなるに
蘇命路の山。」といふのがある。蘇命路の美しき山
を寫し出した景色だといふ。)緑は浪に浮島が。拂
ふ(原をかけて。)嵐に花ふりて。げに雪をめぐら
す。白雲の袖ぞ妙なる。

シテ「南無歸命月天子。(なむきみやう) 佛法にて
佛を拜む詞、がつてんし。月の事。) 本地大勢至。
(佛法で月の本體は勢至菩薩だと説いてゐる。月を
拜む詞。) 地「東遊の舞の曲。

シテ「あるひは。天つみ空の緑の衣。 地「または
春立つかすみの衣。(舞ひて翻す衣の様を色々に見
なしていふ。) シテ「色香も妙なり少女の裳。左右
左。さいう颯々の。(左右左は古舞踏に身を振舞つ
たのから云つた舞の様子、颯々は舞の衣を吹く風
の聲か。) 花をかざしの天の羽袖。靡くも返すも舞
の袖。

地「東あそびのかずく。に。その名も月の色人
は。(白氏文集に、「三五夜中新月色」とある。其の
名も此の詩の句にあるやうに月の色人であると云
ふので色人は天女を指す。) 三五夜中の空に又。(十
五夜の明かな空の上に又) 満願真如の影となり。
(すべての願が満足つて本の心に返ることを月影

の明なるに譬へて云ふ。) 御願圓満國土成就。七寶
充滿の寶を降らし。(七寶など種々の充滿した寶を
天から降らせる。) 國土に是をほどこし給ふ。さる
程に時移つて。天の羽衣浦風に。たなびきたなび
く三保の松原。浮島が雲の。愛鷹(あしたか)山や
富士の高嶺。かすかになつて天つみそらの。霞に
まぎれうせにけり。(三保、浮島、愛鷹、富士、段々と
天人の遠くなる様を駿河の名所であらはす。)

童話の羽衣

月の世作に美しい姫様の天人が大勢住んでゐ
ました。十五人の天人は眞白な着物を着てゐまし
た。又十五人の天人は眞黒な着物を着てゐました。
天人達は月の世界の女神様と一緒に毎晩人間の住
んでゐる世界や、色々の星の世界を見おろしてゐ
ました。

或晩眞白な着物を着た一人の天人が女神様に、

「女神様、私は人間に住んでゐる世界に行つて見たくになりました。行つてもよろしう御座いますか。」

と伺つて見ました。女神様は、

「あゝ、よろしいよ。夜が明けたら、お出かけなさい。」

So」

とおつしやつて、天人の羽衣といふ着物を下さいました。其のうちに東の空がぼつと明るくなつて、お日様の乗つていらつしやる金のお船で吹立てる喇叭の音が、向ふの方から聞えて來ました。

天人は、

「女神様いつて參ります。皆さんいつて參ります」と言つて、天人の羽衣を着ました。すると、天人の體はふわりと浮き上つて、白鳥のやうに、ふわ／＼と高い空を飛んで、人間の世界の方へ舞降りて來ました。

月の世界の眞白な着物を着た天人達は、よい匂

のする薔薇や蓮華の花を降らせました。眞黒な着物を着た天人達は笛や鼓のよい音楽を響かせました。

すつかり夜が明けて、お日様から流れ出した金の波が海一面に光つてゐます。緑の松原の向ふの空には、目を覺した富士のお山が、藍色の大きな／＼扇を、ぱつちりと擴げてゐます。沖の方で千鳥が、

おてんとう様　ご機嫌さん、

三保の松ばら　お早うさん、

富士の山さん　よいおかほ。

と歌つてゐます。その時、濱邊の白い砂の上へ、よい匂の花が、ばら／＼、ばら／＼と降つて來ました。何とも言へないよい音楽が、チラー、チラーと聞えて來ました。そして空から羽衣を着た天人が、すつと舞ひ降りて來ました。

松の木にとまつてゐた雀達がびつくりして、

「美しいお姫様だね、何處から來たのだらう。」

「天から降つて來たのだよ、人間ぢやないよ、天人だよ。」

「此處には天人の友達なんかゐないから淋しいだらうね。」

天人は雀の言ふことが皆わかりました。天人は羽衣を脱いで松の木の枝に掛けると、松原の中を向ふの方へ歩いて行きました。

伯良といふ漁師が、釣竿を擔いで出て來ました。

松の木の枝に見たこともない美しい着物が掛けてあるのでびつくりしてしまひました。

「誰が掛けておいたのだらう。」

香つて羽衣を松の木からゑろして見ました。見ると天堯るほど美しいので、

「か麗な着物だなあ。持つて行つてうちの寶物にもよう。」

「おれが羽衣を大切にかゝへて歸らうとする所へ

天人がもどつて來ました。

「もし。其の着物は私のです。それは天人の羽衣と言つて、人間の着るものではありません。どうぞ返して下さい。」

と申しました。伯良は天人を見て又びつくりしました。眞白な着物を着て、髪に月の世界で咲いた美しい花の飾りを附けた天人のやさしい姿は、拜みたいやうに見えました。伯良は、

「では此の着物はあなた様ので御座いますか。此の着物は天人の着物で御座いますか。それは珍しいものを拾ひました。これは天子様に差上げてお國の寶物に致しませう。此の着物は私が貰つて行きます。」

と言つて歩き出しました。天人は、

「待つて下さい。私は其の羽衣を着なければ空を飛んで月の世界へ歸ることが出来ません。私は天人ですから人間の世界にはをられません。ど

「お返して下さい。」

言つて頼みましたが、伯良は返さうとはしませ

と木の雀達は、天人を可哀想に思つて、

あの天人はもう天へ歸れないのだ。」

「わるい漁師だ、早くあの羽衣を返してやればよいに。」

「天人は天へ歸れなかつたら、死んでしまふかも知れないね。」

波の上を飛んでゐた鷗達も、天人のあはれな様子を見て、近くへ寄つて來ました。

「羽衣をとられたのだ。」

「あゝ可哀想なことだ。」

沖の方から千鳥も飛んで來て、

「もう天へ歸れないのだ。」

「何といふ氣の毒なことだらう。」

と話し合つて居ます。

鶯も來て、

「ピィ ヒヨロ〜〜〜」

オィ ヒヨロ〜〜〜。

ピィ ヒヨロ〜〜〜。

オィ ヒヨロ〜〜〜。

と歌ひながら天人の上の空へ輪を描いてゐます。

春風が氣の毒さうに吹くと、松が、

「かへしておやりよ、羽衣を、

かへしておやりよ、伯良さん。」

と細い聲を立てました。波も、

「おかあいさうな お姫様、

おかあいさうな 月姫さん。」

と言つて岸を打ちました。

天人は高い天を見上げて、

「私は羽のない鳥のやうなものだ。私は天へ歸れない、どうしたらよいであらう。」

と悲しがりました。

雀も、鷗も、千鳥も、鳶も、

「私の羽をあげませう。」

「私の羽をあげませう。」

と聲を揃へて言ひました。天人は、

「いゝえ、其の羽を貰つても、其の羽では飛べま

せん。羽衣を着なければ、どうしても天へは歸

られません。」

と言つてを涙こぼしました。

空に浮んでゐた白い雲が、

「では私に乗つて月の世界へお歸りなさいませ。」

と聲をかけました。

「いゝえ、いくら天人でも羽衣がなくては、雲に

乗つて天へは上られません。」

と天人がこたへました。松風や、波の音が、

「かへしておやりよ 羽衣を、

かへしておやりよ 伯良さん。」

「おかあいさうな お姫様、

おかあいさうな 月姫さん。」

と歌ひました。漁師は天人が可哀想になつてしまつて、

「ではお返し申しませう。」

と言ひました。天人は、

「あゝうれしや、天へ歸られます。さあ返して下

さう。」

と言つて両手を差出しました。

伯「そのかはり、今此處で天人の舞を舞つて見せ

て下さいませ。」

天「舞つて見せませう。まづ其の羽衣を返して下

さう。」

伯「いけません。これを返したら、あなた様は舞

を舞はないで、天へ上つておしまひになるでせ

う。」

天「天人はうそを言ひません。天人の住む世界にはうそといふものはありません。天を御覽なさ

言はれて伯良が天を仰ぐと、雲の間から光り輝く女神様のお姿がきらりと見えて、忽ち眼がくらんでしまひました。

「ごめん下さいませ。ごめん下さいませ。私はわるい事を申しました。さあお返し申します。」
 と言つて、伯良は天人に羽衣を返しました。

天人が喜んで其の羽衣を着ると天人の體はふわりと空へ舞ひ上りました。すると、天からよい匂のする薔薇や、蓮華の花が、ぱら／＼、ぱら／＼と降つて來ました。そして笛や鼓のよい音楽が、チララー、チララーと響いて來ました。

天人は其處で舞を舞ひ始めました。伯良は天人の舞があまり美しいので、見とれてしまひました。雀も、鷗も、千鳥も、鳶も、嬉しくて嬉しくてたまらないといふ様に、天人のまはりを飛び廻りました。春風は天人の羽衣をやさしく吹いて、松風

や波の音は、

「ラ、ラ、うれしや、うれし。

ラ、ラ、うれしや、うれし。」

と囃しました。

舞が終ると、天人は富士のお山の上の上の方へあかつて、行つて雲の中へかくれてしまひました。

